

御申じょう（ごしんじょう）療法（5）

今までの4号までは、御申じょう療法が、いかに現代医学で解決されていない疼痛に対してほとんど奇跡に近い効果が認められることの不思議さを中心に書いてきました。種々ある疼痛のどれも原因がはっきりとせず、現代医学では治療学の発達により補ってきていました。もちろんそれはそれで効果があるのでいいことなのですが、最終的な段階になるとどうしても、身体が耐えられず苦しみながら人生を終わる・・・ということになるのが現実です。御申じょう療法は内服などを使わず鍛え抜かれた二本の金の棒で身体中を擦る、押し付けるだけで長年治癒しなかったすさまじい疼痛も、アトピーも、ステロイドを散々



使った後の突発性難聴も軽快するので、いくら今の医学が万能だと思っても、自分たちにできないことは、謙虚に認めなくていけないのではないかと信じます。しかも“御申じょう療法”は全く副作用なしなのです。ただ、これまでは、受診した人が軽くなって、良くなった・・・とあって帰っていくのみで、データらしいデータはありませんでした。言い換えれば、「メディカル・エビデンス」がほとんどなかったといっても言い過ぎではありません。現代の医学から匙を投げられ、はじき出されて来た人も“藁”をもつかむつもりでおられます。たまたま私が貴峰道にい合わせた時に、大きな身体でいかにもエネルギッシュな人と一緒になりました。肺のX-RAYを見せていただきましたが、巨大な肺がんがあり、縦隔洞（心臓や大動脈、食道などが通る右肺と左肺のあいだの大事な空間で、古代中国のお医者さんは、^{やまいこうこう}病膏肓にいて、ここに病気が入ったら、すべての治療をやめたというところ）まで転移し、頭から心臓に入る大静脈を圧迫し、顔は血液の環流が悪くなっているために^{むくみ}浮腫んで紫色になっていました。ある副作用の強い化学療法を医師に進められていましたが、あまりに副作用の弊害をいわれ、自分で拒否していたのです。このままでは一ヶ月は持たないと診断し、是非“御申じょう療法”をしながら、思い切って化学療法を受けなさいとアドバイスをしました。その後、二ヶ月経ち、貴峰道でまたまた偶然お目にかかりました。なんと顔色もよく、浮腫みなどもなく、かすれていた声ははっきりとして、来月は中国旅行に行くと言っておられたのです。化学療法が効いたのです。しかも、副作用が全くなく、主治医はこんなに副作用がないことは初めてだと言ったそうなのです。ご本人のためにもすばらしいことなのですが、この事例



も“御申じょう”が、化学療法を助けて病状を好転させたというメディカル・エビデンスには、残念ながらならないのです。これは化学療法が効いたのである・・・と決められるに違いありません。

人間て不思議なものです。痛いときはいてもたってもおられません。が、一旦、治ればけろっとして忘れてしまうものなのです。突然、耳が聞こえなくなって困った困ったといいますが、また、元のように聞こえるようになれば、その人にとってはある面では当たり前になったのです。アトピーなどに至っては、皮膚からあれだけの浸出液が出て、手がつけられないほど親も苦しんだのに、治癒してしまえば、子供は元に戻ったのですから、もとの当たり前の顔になってしまうのです。いつの間にかそのときの苦労は忘れてしまいます。私は、人というものが“恩知らず”といっているのではありません。だれでも、何かの時、そのときの苦しい時を思い出しますが、普通は“喉元過ぎればなんとやら”であって、それが普通なのではないでしょうか。

そういった意味で、“御申じょう療法”は、“知る人ぞ知る”という地位しか与えられていませんでした。残念なことです。あるはっきりとしたエビデンスが出現するまでは、特に医学会などに認められるようにも思えませんでした。

ところが、極々最近のことです。御申じょう療法のみを行って、奇跡的にどんどん縮小している“胃がん”の症例が、出てきたのです。画期的なことです。この症例を今日は、このシリーズの最終回として報告したいと思います。

57歳 男性 事務職

生来、健康であったが、2008.9 ころよりお粥はおろか、水分もほとんど飲めなくなった。

2008.10.24、“貴峰道”初診。触診で上腹部は、ほとんど硬い腫瘍で占拠され、(図1) 激しい圧痛を訴えた。ただちに“御申じょう療法”を開始し、早いうちの医師の受診を勧めた。“御申じょう療法”2回の治療後、医師受診。胃透視を受けた。(図2)のように胃の上辺の部分(小弯)は、食道直下より胃の出口である幽門まで達し、胃の下辺の部分(大弯)は、幽門から大弯の半分まで(マジックで印があるところ)癌細胞に置き換えられている状態であった。すでに、“御申じょう療法”が2回行われ、バリウムが通るようになっていく。胃カメラは図(3)のごとく、胃角上部に巨大な癌性潰瘍を形成しながら幽門に向かって浸潤しているわれわれの分類で **Borrman** (ボルマン) IIIのタイプで周囲に浸潤性で、たちの悪い方に入る。案の定、主治医は手術は不能ですから、化学療法でもやりましょうか？でも胃がんに化学療法はあまり効果はありませんから期待しないでください・・・といわれ、奈落のそこに落ち込む思いで、再び“御申じょう療法”にかえってくることに。

2008.10.24～2008.25 まで、計18回“御申じょう療法”を施行す。その間、一切の化学療法も健康食品も使用していない。食欲は旺盛となり、なんでも食べれるようになっている。2回目は省略するが2008.11.25の第3回胃透視が(図4)である青いボールペンで示すように胃がんは約1/2に縮小し、胃の出口のほう(前庭部)は直径が倍になり、バリウムの流れもよく、何でも食べられる。ご本人も大変元気になり、仕事に飛び跳ねられるようにな

った。(図 5) は 2008.11 のおなかの触診の図で、腫瘍塊は非常に小さくなっている。

その後、12 月になって広島まで来られ、わたしも触診をしましたが、幽門部に 4 cm の mass (しこり) を触れただけでした。腫瘍の容積からいえば、ほぼ 1/20 くらいになっていると思われる。まだ、その後も“御申じょう療法”を行っておられるようですが、2008.11.25 までの 18 回で随分好転しています。この調子なら、手術療法と化学療法の組み合わせだって可能です。それもご本人にはお話しましたが、ご本人は、ここまで“御申じょう療法”でよくしていただいたので、このままお任せしたいとのご意見でした。それもすばらしい選択肢ですとお答えしたようなわけです。(図 6) はほぼ普通に食べ物が通過している胃カメラ像です。これで約 1 ヶ月の治療後なのです。

腫瘍マーカーの変動も記載しておきます。

この症例の場合は、腫瘍マーカーでも CEA はほとんど変動が無く、CA19-9 (正常値 25U 以下) が動いています。

2000.10.14; 125.8U

11.17; 80.6U

12. 5; 39.9U

このように化学療法を全く使わず、“御申じょう療法”のみで、胃の原発巣の縮小と共に、癌の大きさや程度を推測する腫瘍マーカーもどんどん正常化に近づいています。

貴田師は今まで色々な症例に対して、試行錯誤も繰り返しながら治療してこられました。ついに“メディカル・エビデンス”を伴った治療例を手に入れられたのです。まさに、無限の可能性が“御申じょう療法”には開けているといえましょう。

最後に、松本元先生の言葉を申し添えて、終わりにします。・・・ごしんじょう療法が、貴田晞照先生によって開発されたことは、日本人として極めて誇りに思うと共に、科学的解明によってこの手法をさらに高め、21 世紀の新しい医療として世界の人々の福祉に役立てるようになることが、我が国の全人類に対する責務であろう・・・

元日本生物物理学会会長・理学博士

松本元

参考文献

貴田晞照著：超医療 御申じょう

松本元著：神経興奮の現象と実体

松本元著：“脳は愛のためにある”「愛は科学で解けるのか」



图 1

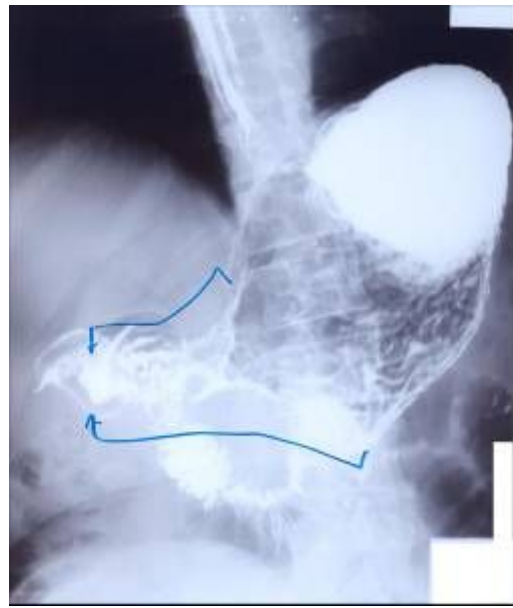


图 2

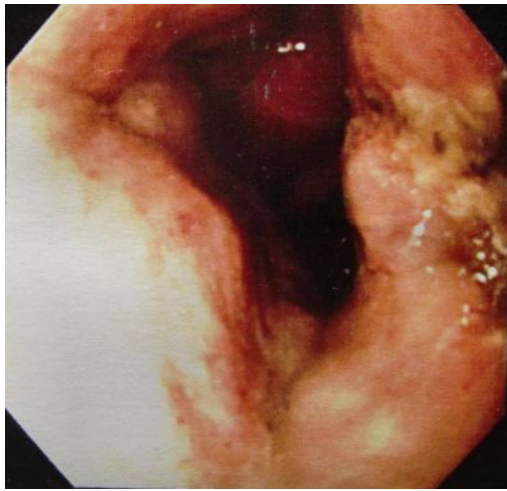


图 3



图 4

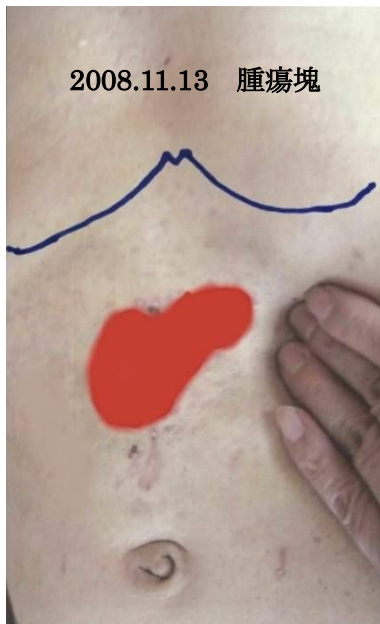


图 5

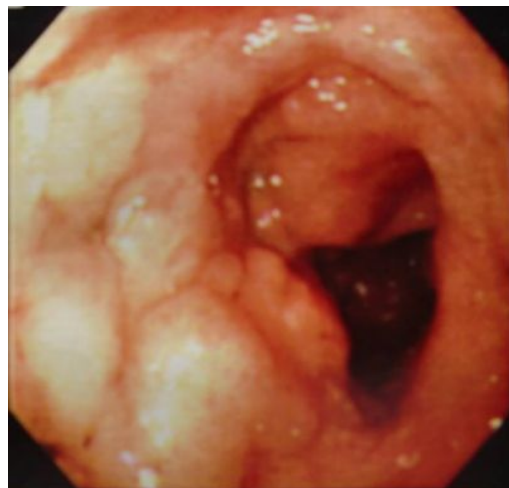


图 6